

こうほう ショッキング

Vol.55

Kōhō shocking



みやの のぶえ
宮野 伸枝さん

●プロフィール

33歳。巖原町久田出身、在住。西九州大学社会福祉学科を卒業後、アメリカへ留学。児童デイケアセンターでインターンとして約1年間研修。帰国後、発達障害特化型支援機関で研鑽を積む。30歳で帰郷し「NPO法人 プライタール・ステップス」を立ち上げる。長崎県指定障がい児通所支援事業所として、2歳から18歳までの子どもの発達支援を行う。夫との2人暮らし。

○福祉に興味を持ったきっかけは？

中学3年の時、学校活動で老人ホームにうかがう機会が何度かあり、福祉に興味を持ちました。担任の先生も親身になって進路を探してください、鹿児島の高校へ。介護福祉士の資格を取得して大学に進み、高齢者のデイサービスでアルバイトもしました。お年寄りが大好きだったので、この先も高齢者福祉の道を進むとしか思っていませんでした。ところが、大学の教授に「一度は児童福祉の分野を経験しては？」と言われて知的障がい児の通園施設に実習に行つたところ、どつぶり浸かって方向転換。急いで教員免許も取り、社会福祉士を取得しました。

○海外での研修はいかがでしたか？

研修先のセンターは、障がい児と、その兄弟児が共に過ごすデイサービス。そこで見たのは、問題行動を取ってしまう兄弟のことを、障がいを持たない兄弟児が幼い時から恥ずかしがることも怒ることもなく、受け入れている姿。兄弟の間で我慢しないといけないのは、どうしても障がいを持たない兄弟児の方で

すよね。でもそこでは「人には皆得意な事と苦手な事がある」ということを幼い時から教えるれ、どちらの子も同じ愛情を受けている。差別や偏見という概念はどこにもなく、真の共生に触れることができ本当に感動しました。

○昔から自分の「未来予想図」をお持ちでしたか？

中学生の時に福祉の道を選んだ時から「対馬に帰ってきて必ず福祉の仕事をする」と漠然となんですが決めていました。より具体的になったのは大学で児童福祉の道に出会った頃。町である親子に出会ったんです。おそらく自閉症だったのでしょうか、店内で動き回る子どもに周囲からは無言の不快感が漂っていました。その時、なぜかその子が私の服を引っ張り始めたんです。お母さんは泣きそうな顔で何度も謝られました。「いいですよ、服を持って安心なら持つてもらいましょう」と言うと、「対馬でそのように言ってもらえたのは初めてだ」と喜ばれました。この時私は「こんな生きにくい思いをしている保護者や子ども達のためにも、役に立てる施設を対馬に必ず作ろう」と心に

決めました。

○「プライタール・ステップス」の名前に込めた思いは？

子ども達の可能性は無限大。それをより輝かせ、より確かな未来を生きていってほしい。一つ一つのステップを大切に、一人一人に合った方法を使って、輝かしい未来に向かって行けるように、と名付けました。

○これから目指していきたいことは？

「障がいを持つ人たちが堂々と生き甲斐を持って生きていけるようにしたい」というのが目標です。好きなことや得意なことを伸ばし、それを本職に出来るような環境を作りたい。絵を書くことが大好きなら、作品にして販売できる場所。遠くからでも買に行きたくなるようなパン屋さん。そうすることで、障がいを持つ人への目も変わり、共に生きていくことができると思っんです。

毎回、登場して下さった方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。次回は巖原町今屋敷にお住まいの渡辺久美子さんです。お楽しみに。